

目次

第12回大会報告

研究発表・シンポジウム

総会報告

大会を終えて……………早田由美子

大会発表・参加記…浅井幸子・浅野俊和・田中友佳子

幼児教育史素描……………勝山吉章

新入会員・会員異動

寄贈図書

機関誌編集委員会からのお知らせ

事務局からのお知らせ

第12回大会報告

2016年12月10日(土)に千里金蘭大学で幼児教育史学会第12回大会が開催され、研究発表・シンポジウム・総会が行われました。また、会場では愛珠幼稚園の展示が行われました。第12回大会の詳細は以下の通りです。

研究発表

司会：勝山吉章(福岡大学)

高田文子(白梅学園大学)

1. 藤野敬子の目指した子ども主体の保育とは

永倉みゆき(静岡県立大学短期大学部)

2. 幼稚園教育実践内容の「会集」に関する研究

—山口県における仏教系幼稚園鞠生(華浦)幼稚園の保育史料を中心に—

三吉愛子(広島大学・院)

3. 廣瀬興の育児思想

—総力戦体制下を中心に—

浅野俊和（中部学院大学）

4. 戦後日本における里親の組織化と科学化

—秋田県里親会連合会の設立期に着目して—

田中友佳子（九州大学）

5. 占領期における幼児教育の民主化・科学化・社会化をめぐって

—米国国立公文書館での GHQ 関係資料調査をもとに—

首藤美香子（白梅学園大学）

6. 「伝えあいの心理学」の成立と東京保育問題研究会

—1960年代後半の表現三部会合同研究を中心に—

浅井幸子（東京大学）

シンポジウム

テーマ：江戸の子育てから明治キンダーガーデンへ

講演及び対談：

太田素子（和光大学）

＜家と村の子育て＞からの離陸—保育・幼児教育はどのように国民のものになるか—
是澤博昭（大妻女子大学）

節句に見る子供—近代からみる江戸の子育て—

司会：オムリ慶子（関西学院大学）

福元真由美（東京学芸大学）

第12回大会 総会報告

報告事項

1. 第11回大会年度（2015.10.1～2016.9.30）会務報告

事務局長より、以下の会務報告がなされた。

(1) 会員数：2016年11月末現在169名。

(2) 第11回大会：2015年12月5日、福山市立大学にて開催された。大会参加者50名、福山市立大学研究交流センター共催シンポジウム参加者約180名、「若竹の園」見学参加者27名。

2. 編集委員会報告

欠席の編集長・副編集長に代わって、事務局長より編集委員会報告がなされた。『幼児教育史研究』第11号を2016年11月10日付で発行。編集長一見理事、副編集長村知理事。

3. J-STAGE への移行について

J-STAGE 担当の浅野理事より、J-STAGE への移行について経過報告がなされた。第11号よりJ-STAGE へ移行予定。

4. 会報の発行について

事務局長より、会報の発行について報告がなされた。第21号を3月1日、第22号を6月30日に発行し、その後Web版を学会ホームページ上に公開。

5. その他

事務局長より、理事選挙の予定について説明がなされた。これと関連して、次期編集委員会より委員体制を拡大する方針について報告がなされた。

阿部理事より、記念事業の進捗状況について報告がなされた。

審議事項

1. 第11回大会年度（2015.10.1～2016.9.30）決算

福元会計担当理事より資料に基づき説明がなされ、第11回大会年度決算が承認された。

（省略）

2. 第12回大会年度（2016.10.1～2017.9.30）事業計画

(1) 『幼児教育史研究』第12号の編集

事務局長より、『幼児教育史研究』第12号の編集について説明がなされた。編集長高田理事、副編集長一見理事。

(2) J-STAGE 上での公開について

J-STAGE 担当の浅野理事より、J-STAGE 上での公開について説明がなされた。第11号以降の公開は3月20日頃を予定。

(3) 会報の発行

事務局長より、会報の発行について説明がなされた。第23号（第12回大会報告）を2月頃、第24号（第13回大会案内）を6月頃に発行予定。

(4) 第13回大会の予定

事務局長より、第13回大会の予定について説明がなされた。2017年12月9日（土）、東京大学にて開催予定。その後、第13回大会実行委員長である浅井幸子会員より挨拶があった。

3. 第12回大会年度（2016.10.1～2017.9.30）予算案

福元会計担当理事より資料に基づき説明がなされ、第12回大会年度予算が承認された。

（省略）

大会を終えて

実行委員長 早田由美子（千里金蘭大学）

幼児教育史学会第12回大会は12月10日に千里金蘭大学で開催され、63名の参加者にお集まりいただきました。うちわけは会員47名（うち院生1名）、非会員16名（うち院生・学生7名）でした。

学会運営の経験がない中、大会をお引き受けしてしまい、手探りで進めるような状態でしたが、学会事務局長をはじめとする皆様のご助言ご協力、スタッフの学生さんたちの応援に支えられ、なんとか終わることができました。心よりお礼申し上げます。当日は行き届かなかった点が多々ありましたことお詫び申し上げます。前年の大会のような公開シンポジウムも開催できませんでしたが、たくさんの会員および非会員の方にご参加いただき、ありがたく存じます。

午前中の自由研究発表は6件のお申し込みがありました。

全発表を同じ会場で実施する場合、発表時間が短くなるデメリットがありますが、参加者全員が全発表を聞けるというメリットがあると考え、例年通り、一堂に会して発表を聞く方式を取りました。戦前、戦中、戦後にわたる日本の研究発表について活発な意見交換が行われました。

午後のシンポジウムは、本学会として初めて近世を取り上げました。

染色家で人間国宝の志村ふくみさんは、江戸時代には「四十八茶・百ねずみ」（48色の茶色、100色のねずみ色）と多様な色が生み出されたと紹介しています。日本の近世にはそれだけ繊細で円熟した文化が存在していたことを示します。他にも平和な社会の中で培われた循環型生活の知恵がたくさん存在します。明治以降、日本は西洋近代の思想を取り入れ、欧米に追い付き追い越せを目標にまい進してきましたが、今日における子どもに関する様々な問題や取り返せないほどの環境破壊などの問題を前にして、近代以前の日本の在り方にむしろヒントがあるのではないかと思ひ至るようになりました。そこで、江戸の子育てを中心に二人の碩学、太田素子会長（和光大学）と是澤博昭会員（大妻女子大学）にご講演いただきました。家訓、往来、日記、覚書、農書、浮世絵、玩具、節句など豊富な史料や日常物質文化を駆使したご講演は示唆に満ちており、2回3回と近世を取り上げてほしいという感想も頂戴しております。是非、近代社会を大きく見直すためにも研究やシンポジウムの継続を期待したいと思います。

学会開催と同時に、同じ階の広間で、大阪・北浜の愛珠幼稚園の110周年写真集を基にしたミニ展示を行いました。明治13年に創設され現代も続くこの幼稚園の開設当初には、江戸の習俗や価値観の名残ともみられる部分がありました。開設当初は読み書き算数の時間を各々週3回割くなど知育にも重点が置かれていたが、時代が進むにつれて徐々に遊びに割く時間が多くなったことなどの興味深い変化もありました。

総会終了後、北千里で開催された懇親会には25人参加していただき、交流を深めることができました。皆様のご協力に感謝いたします。

来年度は浅井幸子会員が中心となり東京大学で開催される予定です。会員の皆様のいっそうのご協力をお願いいたします。

大会発表・参加記

浅井幸子（東京大学） --- 幼児教育史学会第 12 回大会に参加して

私は今回の大会で、乾孝さんの「伝えあいの心理学」について報告する機会を頂きました。申し込みの時に、宍戸先生をはじめ、乾さんと共に活動した方々や乾さんを知る方々から助言を頂きたいと考えていました。実際に、宍戸先生から生活綴方との関係について質問頂き、お答えする中で、気づいたことがあります。乾さんが「話しあい保育」を「伝えあい保育」に変えたことについて、私は生活綴方の発達理論から対話の発達理論への転換として捉えていたのですが、生活綴方の中のコミュニケーションの側面をクローズアップしたと捉えた方が適切なのかもしれませんと思いました。この問いは、乾さんの「伝えあいの心理学」の成立において、「話しあい保育」がどのような意味を持ったかを問うことにつながっています。具体的な史料に即した検討を進めたいと思います。他にも、乾さんや保育問題研究会に関心のある方々から、声をかけて頂きました。励ましや助言をありがたく感じています。

自由発表では、司会者からも指摘があったように、五つの発表のうちの四つが戦後にかかわるものでした。戦後の子育てや保育がどのように展開したのか、多様な研究が蓄積され像を結んでいくのが楽しみです。悔やまれるのは、報告に対して質問もコメントもできなかったことです。せっかくの報告だから何かお返ししたいと思ったのですが、報告のさらなる発展に寄与するような、報告してよかったなあと思えるような質問やコメントが、すぐには出てきませんでした。質疑応答を聞きながら、次は自分も学会を創造的で生産的なものにする責任を担わなければ、と思いました。

午後のシンポジウムでは、太田素子さんと是澤博昭さんから、近世の子育てについて報告がなされました。近世の日常生活や人々の心性を照準するお二人の研究は、多様な史料を用いつつ、それらを重ね合わせて推量し、当時の子育てのあり方を復元していくものでした。明治以降の保育や教育を、活字資料を中心的に用いて研究してきた私には、探偵小説や推理小説を読む時のようなワクワクする面白さがありました。太田さんの報告では、一九世紀初めの浮世絵には、子どもの知的な関心に寄り添うような母親のまなざしが描かれていることが指摘されていました。是枝さんの報告では、雛人形を贈って子どもの出生を祝うという習わしが、上流階級において一八世紀後半に成立していたことが示されました。江戸時代に近代化が始まっているとの指摘がなされていますが、お二人の報告を聞いて、確かにそのような見通しを持って江戸から明治への生活文化の展開を検討する必要があるのだなあと感じました。

来年は、開催校として運営を担うことになります。早田さんの運営は、さりげなくあたたく学会を支える素敵なおものでした。来年も、参加してよかったと思えるような学会になるよう、尽力したいと思います。みなさま、助力頂けますよう、どうぞよろしく願いいたします。また、みなさまの参加を、こころよりお待ちしております。

浅野俊和（中部学院大学） --- 発表・参加記

のっけから引用になって恐縮だけれど、つい先日、「歴史家の仕事は、後世からみて正気

の沙汰とは思えないことが、当時渦中にあった当事者にとっては正気の沙汰に思えた、その理由と背景を内在的に問おうとするところから始まる」という一文に出会った(加藤陽子「〈文庫化に寄せて〉女性を変える、女性が変わる」(上野千鶴子『〔対談集〕ニッポンが変わる、女が変わる』中公文庫、2016年、p.170))。ここでいう「正気の沙汰とは思えないこと」が指し示すものは、まさに「戦争」である。

近年の大会における研究発表(や学会紀要の掲載原稿)では、アジア・太平洋戦争後の「現代史」、いわゆる「戦後史」を扱うものが急速に増えてきている。今回の第12回大会も、そのような傾向が見られたように思う(ただし、午後は「近世」を対象としたシンポジウムであった)。しかし、そうした「現代史」研究へと触れる度に感じさせられるのは、なぜ「戦後」を扱いながら「戦争」の問題が捨象されてしまうのかということである。

「子どもの世紀」として期待された20世紀は、2つの世界大戦や「冷戦」などが示すように、実際は「戦争の世紀」であった。そして、私たちが生き、「戦後」(あるいは「ポスト戦後」)だどとらえ続けてきた「現代」は、後世から見れば新たな「戦前」なのかもしれない。そのような認識なしに、果たして「戦後」幼児教育史研究は成り立ち得るのか。かなり挑発的な問いかけではあるけれど、これは「現代史」研究へとシフトしてきた本学会の動向に対する大会参加者(一会員)の率直な感想である(そうした問題自体は、2012(平成24)年の第8回大会(於・福岡大学)及び2014(平成26)年の第10回大会(於・お茶の水女子大学)における各シンポジウムでもわずかながら言及されていたと記憶する)。

一方、発表者としての感想を、あえて自戒の念を込めて記すならば、冒頭の引用にもある「内在的に問おうとするところ」の難しさを改めて痛感させられたこととなろうか。近年、どの学会に参加しても、明確な「結論(分析・考察の結果)」が示されない研究発表が増えてきている。自分自身、そうならないようにと悪戦苦闘して何らかの結論をひねり出すものの、並べた文章は結果的に「紋切り型(ありきたりの解釈)」で終わってしまう。

有馬学によれば、「過去は外国である」と喩えられ、その「異文化を探ることは、異なる世界における〈当たり前〉を探ることだ」けれど、「われわれが〈過去〉に向き合うとき当然意識されるべきこの距離感、昭和戦前期という比較的新しい〈過去〉に対しては、往々にして忘れられてしまう」という(同『日本の歴史23 帝国の昭和』講談社学術文庫、2010年、pp.9-11)。いかに「距離感」を調整し、〈当たり前〉をどう「内在的に問」うのか。これは、自らの課題のみならず、前述の「現代史」研究にも求められるものであろう。

田中友佳子(九州大学・学術協力研究員) ---第12回大会を振り返って

幼児教育史学会には昨秋に入会したばかりで、今回が初めての大会参加となりました。12月初旬、大会校の千里金蘭大学に向かう途中、楓の並木道が紅や黄に色づき、とても美しかったのを思い出します。

今大会では「戦後日本における里親の組織化と科学化―秋田県里親会連合会の設立期に着目して」というテーマで発表させていただきました。私はこれまで植民地期朝鮮の児童保護史を主に研究の対象としてきましたが、日本「内地」も調べていくうちに、里預けや里親制度の歴史に関心を持つようになりました。近年では、家庭養護の推進が政策課題として掲げられるようになりましたが、そもそも里親制度がどのように認識され運用されてきたのか、

求められる里親像はいかに変化してきたのかといった歴史的な問いを持ちながら社会的養護の転換期である「今」に向かいたいという思いもあります。

実を言いますと、里親というテーマを幼児教育史学会の会員の皆様に受けとめていただけるか、本当に不安でした。しかし、予想に反してたくさんのご質問をいただき、幼児教育史学会の裾野の広さ、懐の深さを感じました。里親委託された子どもの年齢について発表では触れなかったのですが、その多くは乳幼児ではないというご指摘もいただき、乳幼児期の子どもの委託、つまり労働力としてではなく養子縁組などを前提とする里親委託についても目を向ける必要があると考えさせられました。

より長い時代のスパンで子育て意識の変容を捉える必要性も強くしました。とても幸運なことに、今大会の午後のシンポジウムでは、江戸の子育てがテーマでした。太田素子先生は近世の子育て文化を人口史料や浮世絵、日記などからあぶり出し、幕末維新期の保育構想への繋がりを探るというご報告をされました。また是澤博昭先生のご報告では、節句行事を分析することを通じて、親や周囲の人々が子どもに抱いていた想いを浮かび上がらせるという試みがなされました。家族と村（共同体）の関係性や子育てへの関わり方が、江戸から明治期にかけていかに変容したのか、近代への繋がりをどう捉えるのが論点の一つとなりました。子育ての文化や意識の変容を、より長い時間軸で捉えられる歴史観を持つことの重要性を改めて認識させられた大会でした。

今大会の自由研究発表やシンポジウムは、近世から高度経済成長期までという時代の幅はもちろん、幼児教育・保育の理念や思想の検討、教育と保育の方法の詳細、あるいは史料の再考など、対象とする分野の幅も豊かだったと思います。懇親会では、そうしたさまざまな専門領域を知る会員の先生方にお話を伺い、研究の方向性や意義などについて意見を交わさせていただきました。新参加者の私を温かく迎えてくださり、声をかけてくださった会員の先生方に改めて感謝申し上げます。最後に、早田由美子先生をはじめ大会実行委員会の皆様には大変お世話になりました。貴重な機会をいただけたことを心より御礼申し上げます。

幼児教育史素描

三池闘争と青空保育園

勝山吉章（福岡大学）

敗戦直後ではない。1960年の三池（福岡県大牟田市と熊本県荒尾市にまたがる三井三池炭鉱）には、青空保育園があった。この年、東の安保闘争と西の三池闘争は、その後の日本のあり方を定める分水嶺となった。東西冷戦下、パックスアメリカナーを目論む日米支配層は、極東におけるアメリカの軍事的プレゼンスの安定と、エネルギー資源における対米依存を確立するために石炭から石油へのエネルギー政策の転換をはかった。日本全国の炭鉱は、優良鉱山を残して閉山していく。優良鉱山も、人員削減と増産の合理化に迫られた。

日本有数のカロリー一価の高い出炭量を誇った三井三池炭鉱。ここには、炭労最大の労組である三池労組があった。1950年代の三井による合理化要求を三池労組は鉄の団結で撥ね返していた。59年12月、三井は銀行資本の要請から1,279名を指名解雇とした。その多くは生

産阻害者とされた三池労組の活動家だった。三池労組は、60年1月に無期限全面ストライキに突入。向坂逸郎九州大学教授が、社会主義革命の拠点として学習指導した三池労組は、この闘いを階級闘争として位置づけ三井との一切の妥協を拒否した。

三井は、闘争前から周到な準備をして60年3月に第二組合を結成させ、彼らを就労させようとした。ここに鉦口にピケをはって就労を阻止する第一組合とピケを突破して就労しようとする第二組合との闘争がはじまった。三井は暴力団を雇って、第一組合を襲撃させたが、労組員が刺殺された。このことは全国の怒りをかった。そこで三井と支配権力は、全国から警官隊を召集し、三池労組の弾圧にあたらせた。

その際三井は、三池炭鉱にあった16の保育園を全て閉鎖し、警官隊の宿舎とした。1,300名の園児が閉め出された。警官隊は、ピケをはる三池労組に警棒で襲いかかる。屈強な労組員が、重傷を負いながら次々に病院に運ばれた。警察権力は、弾圧にあっても屈しない三池労組の背後に、頑強な三池主婦会の存在があることを知るや、主婦会の母親たちを次々逮捕、勾留していった。子どもたちの目の前で、父親が警官に殴られ、母親に手錠がかけられた。残った父親たちはピケを死守し、母親たちは全国から応援に来るオルグの接待に追われた。幼い子どもたちは行き場もなくさまよった。

その状況をみた大阪風の子保育園長は、全国私立保育園連盟で三池の子どもたちの実態を訴えた。それがきっかけとなって「三池の保育所を守る会」が結成された。全国から保育労働者の支援オルグが駆けつけ、60年6月、第一組合に残った保母と各地の炭住社宅で巡回保育を行った。会社の言いなりになることを「フレーベル精神」と謳っていた第二組合の保母は加わらなかった。これが三池の青空保育園である。60年安保の敗北感から行き場を失った学生たちが学生セツルメントとして青空保育園に加わった。慶応、東大、東京教育、法政、早稲田・・・などの名前が、当時子どもだった人たちから上がる。また羽仁説子氏など日本子どもを守る会のメンバーが絵本などをもって救援に駆けつけた。

三池の青空保育。それは、保育労働者と全国の労働者との連帯の証しであり、労働運動史のなかに刻まれる金字塔であると言って良いだろう。



(三池労組提供)

新入会員・会員異動 (省略)

寄贈図書

アストリッド・リンドグレーン (著) 石井登志子 (訳) 『暴力は絶対だめ!』岩波書店、2015年。

三時眞貴子・岩下誠・江口布由子・河合隆平・北村陽子 (編) 『教育支援と排除の比較社会史: 「生存」をめぐる家族・労働・福祉』昭和堂、2016年。

沢山美果子 『江戸の乳と子ども: いのちをつなぐ』吉川弘文館、2017年。

機関誌編集委員会からのお知らせ

1) 機関誌 (冊子) における記載の訂正 (お詫びとお願い)

お手元の冊子、『幼児教育史研究』第11号(2016)におきまして下記の書誌情報に不備がございましたので、お詫びとともに訂正させていただきます。該当ページに以下コピーを切り取って貼りこむか、挟み込んでいただければ幸いです。お手数おかけいたします。

なお J-STAGE には下記訂正版のほうで搭載すべく作業を進めておりますことをあわせてご報告いたします。

記

p.33 脚注 1)を以下に訂正

1) 中村正直「フレーベル氏幼稚園の概旨」『日々新聞』1987年11月24日(再録: 倉橋惣三・新庄よしこ『日本幼稚園史』東洋図書、1934年、46-48頁)。

p.36 脚注 4)を以下に訂正

4) 生江孝之『社会事業概要』巖松堂書店、1923年(再録: 吉田久一・一番ヶ瀬康子編『社会福祉古典叢書4 生江孝之集』、鳳書院、1983年、267頁)。

以上

2) 論文募集のお知らせ

『幼児教育史研究』第12号への投稿論文(研究論文・研究ノート)を募集いたします。論文は、2017年5月1日から5月31日までに事務局にお送りください(郵便は当日消印有効、宅配便などは必着)。詳細については機関誌および学会ホームページ掲載の投稿要領をご確認ください。多くの会員の皆さまからのご投稿をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は10月1日から翌年の9月30日までです。今回、振込用紙は、会費納入状況を確認のうえ、第12回大会年度（2016年10月1日～2017年9月30日）とそれ以前の年度の会費が未納の方に、お送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。

年会費：一般会員 7,000円、特例会員（学生・退職者等）4,000円
送金先：口座番号 00190-9-73668、加入者名 幼児教育史学会

今回は該当の会員にのみ振込用紙を同封していますので、それが入っていない会員は完納状態にあります。なお、2017年1月現在の会費納入状況をもとに請求させていただいております。本状と行き違いでご納入いただきました場合は、何卒ご容赦ください。

2) 会報原稿の募集

会報を通じて研究情報の提供と研究者間の交流に努めています。会員研究情報、新会員の自己紹介（全員の方をお願いしています）、海外幼児教育だより、幼児教育史研究への提言などをお寄せください。文量は3,000字程度で、メールまたは郵便で、なるべくデータをつけて事務局までお送りください。年2回の会報発行時まで届いた分を随時、掲載します。次回の会報は2017年6月頃に出る予定です。

3) 役員選挙実施のお知らせ

今年は役員選挙の実施を予定しています。また追ってご連絡いたしますので、ご協力の程お願い申し上げます。

4) 所属・住所などの変更届けに関するお願い

変更が生じた場合は事務局までお知らせください。

幼児教育史学会会報 第23号 2017年 2月 1日

発行者 幼児教育史学会
〒112-8610 文京区大塚 2-1-1
お茶の水女子大学 小玉亮子研究室気付
幼児教育史学会事務局
Tel/Fax: 03-5978-5342
E-mail: admin@youjikyokushi.org
郵便振替 00190-9-73668